

## 専門学校生の性の実態と性教育の実践

著者	木村 正治, 久佐賀 真理
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	45
ページ	63-77
発行年	1996-12-10
その他の言語のタイトル	Study of Sexual Behavior and Education in Special School Students
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/2321">http://hdl.handle.net/2298/2321</a>

## 専門学校生の性の実態と性教育の実践

木村正治・久佐賀真理

### Study of Sexual Behavior and Education in Special School Students

Masaharu KIMURA and Mari KUSAGA

(Received September 2, 1996)

We gave to a group of special school students (n=209, male: 46, female: 163) three lessons of sexual education after making inquiries regarding their sexual recognition and behavior. As a conclusion how sexual education should be given to young people who are sexually mature, the following are proposed:

- 1, Many students thought that sex offers opportunities for learning about mutual human relationships and 40% of them preferred the man to lead in a sexual relationship between men and women.
- 2, 60% of them have experienced sexual intercourse and over 30% of them have successfully used contraceptive measures. As reasons for not using contraceptives, these are incorrect knowledge of sexology, men having a lower level of knowledge than women, and women lacking in assertiveness.
- 3, Some of the students who have not experienced sexual intercourse are satisfied with their situation while others are not.
- 4, As for the effects of these lessons, these were a realization of the need to take responsibility for contraception and an awareness of their own degree of sexual maturity.
- 5, After an evaluation of these lessons, the necessity was expressed for a reconsideration of their level of sexual knowledge and of their sexual lives. In addition, it was felt that sexual education must be given as an aspect of human relationships.

**Key words :** sexual education, sexual behavior, sexual counseling

#### I 緒 言

他者とふれ合うことは生き物の成長に不可欠な要素である。その道筋は親とのふれあい、友達とのふれあい、そして異性とのふれあいへと発展していくが、青年期に始まる性的肉体的ふれあい<sup>1)2)</sup>は人間の成長を促す反面、さまざまな問題を生み出していく。

一般に人が性にかかわる理由としては3つのことがあげられる。一つは二人の関係の中でぬくもりや安心を与え合い、寂しさや生きる喜びを分かち合うという連帯欲、二つ目は性行為によって性的緊張感から解放されたいという快楽欲、そして三つ目は新しい命を生み出したいという生殖欲である<sup>3)</sup>。しかしふれあい行動の一つとしての性交が広がりつつある結婚前の若者たちは<sup>4)</sup>、生殖欲を切り離して考える必要を感じているにもかかわらず、そのことが十分できず、10代の妊娠・中絶の増加<sup>5)</sup>という問題を生み出している。この傾向は若者の婚前性交を容認する意識<sup>6)7)</sup>を見ると、今後ますます高くなると予測される。

このような社会状況を受けて性行動の個人差が広がる青年後期の若者は、すでに性交を経験している者にとっては欲求に従ってとった行動の結果起こる妊娠や性感染症という肉体的問題のみ

ならず、社会の期待する行動から逸脱していないかという性的欲求と性規範との葛藤、また性交を経験していない者にとっては氾濫する性情報と現実の自分とのギャップの中での不安等、さまざまな問題を抱えていることが予測される。

今回は上記の時期にある専門学校生を対象に、性意識・性行動を調査し、彼らの抱える問題を分析した後、性を通して生き方を考えるというテーマの授業実践を行った。その結果をもとに青年後期の学生に対する性教育の課題について考察を加え報告する。

## II 方 法

### 1. 性意識・性行動に関するアンケート調査

調査対象：男性 46 人，女性 163 人，合計 209 人，年齢は 18 歳～25 歳（18～20 歳：98.5%）

調査期間：1995 年 5 月～9 月

方 法：質問紙法

内 容：1) 性教育を受けた経験と役に立った内容 2) 性に関する意識 3) 性行動の現状  
4) 性体験のない学生の意識について

1) は学生の現在の性行動・性意識に影響を与えたものを把握するため、2) 3) 4) は現在の状況を調査するための項目である。アンケートは教師が授業展開の参考にすると同時に、学生が書くことによって客観的に自分を把握することを目的に作成した。

### 2. 性教育の授業

授業対象及び期間：アンケート調査に同じ

方 法：各クラスに一週間ごとに授業を 3 コマ実施した。1 コマの時間数は 70 分クラス（秘書コース及び情報処理コース）と 90 分クラス（老人ケアコース）の 2 種である。クラス編成は医療秘書科 1 年（女性 60 人），情報処理科 1 年（女性 5 人 男性 33 人），医療秘書科 2 年（女性 29 人），老人ケア科 2 年（女性 27 人 男性 13 人），ビジネス・情報秘書科 2 年（女性 42 人）である。

教育目標：教育の目標は日ごろの学生の言動から感じていたことを中心に設定した。

- (1) 身につけている性知識の見直し
- (2) 性を通して自分の生き方に目を向ける
  - 1) 人生の連続性の中で性の問題を考える
  - 2) 性を通して自己の自立を考える

授業概要：表 1 に毎時のねらい，学習内容，学習活動及び教材について示した。

### 3. 授業後の意識調査（定着テスト）

調査対象：同上

期 間：1995 年 6 月～10 月

調査方法：クラス毎 3 回目の授業終了後 2 週間目のホームルームの時間に同様の質問紙法にて実施

内 容：事前に行ったアンケート調査の内「性についての意識調査」の項目について実施

表1 授業概要

	毎時のねらい	学習内容	学習活動及び教材
1時限	時間的経過の中で性をとらえる	①自分自身のこれまでの性の歴史を振り返る ②性交の先にあるものを学ぶ	①アンケート記入 ②テレビ録画「山本かよの出産日記」鑑賞後、感想文作成
2時限	自分たちの性の実態を知り、正しい知識を獲得する	①アンケートの結果から学ぶ	①前回のアンケートの結果を聞き自分たちの間違っただ思い込みに気付き、知識の再確認を行う
3時限	性を通して自立について考える	①専門学校で学ぶことの意味について考える ②妊娠・中絶や性感染症について学び、性と向かい合う時に遭遇しやすい問題を知る ③性の自立に必要な3つの要素 <sup>9)</sup> を知り自分自身を点検する ④三回の授業を振り返る	①経済的自立・精神的自立・社会的自立・性的自立 <sup>9)</sup> の4つの側面から専門学校で学んでいる意味について考える ②ビデオ「中絶」、プリント「性感染症一覧」から両者について学び身体的・心理的・社会的側面から派生する問題を知る ③3つの要素をもとに、自分自身の性的自立を振り返り、質問用紙に記入する ④感想文作成

### III 結 果

#### 1. 性意識・性行動アンケート調査

1) 以前に受けた性教育で役に立った内容について

過去に受けた性教育について学校・家庭・友人いずれの場合も含めて、役に立ったものを2つあげてもらった。解答者は女性104人、男性20人、合計124人(対象数の59.3%)で結果は表2-1、表2-2に示した。

表2-1 役立った性教育—その時期

	女子 (104人)	男子 (20人)	合計 (124人)
小学校	39人 (37.5%)	8人 (40%)	47人 (37.9%)
中学校	44人 (42.3%)	17人 (85%)	61人 (49.2%)
高校	71人 (68.3%)	6人 (30%)	77人 (62.1%)
専門学校	10人 (9.6%)	1人 (5%)	11人 (8.9%)

役立った内容とその理由を見てみると、小学校では生理・精通・受精・妊娠・出産および性概念などがあげられており、理由としての自由記載の中では「初経の時落ち着いて行動できた」「精通があった時驚かずにすんだ」「ずっとおなかから生まれてくると思っていたので」「性に対して新しい考えがわかった」等があげられていた。

表2-2 役立った性教育—実施者別

実施者	女子	男子	合計
教師	121人	25人	146人
親	10人	0人	10人
兄弟・友人	26人	5人	31人
雑誌・ビデオ	5人	0人	5人
その他	2人	0人	2人 (保健所・薬局)

中学校では男女の心理差、性機能の発達、受精・妊娠・出産、避妊、性病、性概念、性器の解剖、生理等があげられており、理由として「男の子が性についてどう考えているか聞いたので」「男女の違いを知り性の

意味がわかった」「初めて着床の様子を知った」「初めての性体験の時に役立った」「性病にもいろいろな病気があるのを知り、その怖さがわかった」「性の意味を習い考えが変わった」「男女の体の仕組みについて全く知らなかったので」「生理痛の対処の仕方を聞いて普通に生活できるようになった」等があげられていた。

高校では中学校の内容に加え、性行為と男女の性反応、出産・育児、中絶、同性愛、病院について（産婦人科の利用）などもあがっており、役立った理由とし「初めての体験の時、避妊法を知っていたので相手の知識だけに頼らずにすんだ」「出産のビデオを見て命の大切さ出産の喜びがわかった」「おりものを通して体の状態がわかるようになった」「実際交際する上で男女の考えの違いを知っていて役に立った」「中絶を学び避妊は必ずするものだと思うようになった」等があげられていた。

役に立った性教育の時期を見ると、年齢が高まるごとに教育への反応も高くなっており学生が成長と共に性教育を必要としていることがわかる。誰による性教育が最も役立ったかを見ると教師によるものが最も高く、親による教育はほとんどなかった。日本の性教育が学校依存型であることがわかる。また役立った理由を見ると、将来を予測して教えられたこと、新しい知識や考え方、異性についての情報（性差の心理）等、より現実に関わるものがあげられていた。

## 2. 性についての意識

左右に対称的な意見を入れ、自分の考えがよりどちらに近いか尋ねた（評定尺度法）。男女間の有意差を見るために  $\chi^2$ -テストを使用した。

### 1) 性における男女の位置関係

性における男女の位置関係については表 3-1 に示した。男女間の意識差は無く、男女いずれも 4 割近い学生が男性のリードを好むという結果であった。

### 2) 避妊の責任

避妊の責任については表 3-2 に示した。男女間の意識差が大きく、男性の 12 人 (35.3%) が避妊は男性の責任であり女性が口にする事への抵抗を示している一方で、女性の 160 人 (98%) が自分の行為に責任を持つために、どちらからでも言うべきだと答えていた。

### 3) セックスについての不安

セックスについての不安については表 3-3 に示した。男女間の意識差が大きく、男性の 14 人

表 3-1 性における男女の位置関係

	左	やや左	やや右	右	
男女の親しい関係においては、男性がリードした方がよい	男 8人	10人	14人	14人	男女の親しい関係においてはお互いに話し合っ て進めた方がよい
	女 14人	49人	38人	60人	
	合計 81人		合計 126人		

(n=207,  $\chi^2$ -test, N. S)

表 3-2 避妊の責任

避妊は男性の責任で女性からは言わない方がよい	男 4人	8人	9人	25人	避妊は自分の行為に責任を持つためにどちらからでも言うべきだ。
	女 0人	3人	27人	133人	
	合計 15人		合計 194人		

(n=209,  $\chi^2$ -test, P<0.005)

表 3-3 セックスについての不安

セックスは妊娠や病気の不安 がつきまとうので怖い	男 2人 12人	19人 13人	セックスは方法をこうじれば 妊娠や病気を防げるもので、 不安はない。
	女 19人 60人	61人 22人	
	合計 93人	合計 115人	

(n=208,  $\chi^2$ -test, P<0.05)

表 3-4 異性との出会いについて

異性との出会いは刺激の一つ でしかない	男 6人 4人	23人 13人	異性との出会いは、成熟した 人間関係能力を身につける貴 重な機会である
	女 5人 15人	73人 67人	
	合計 30人	合計 176人	

(n=206,  $\chi^2$ -test, N. S)

表 3-5 性的成長度の基準について

性的成長度は性体験の豊富さ で示される	男 9人 11人	12人 12人	性的成長度は性体験とは関係 ない
	女 7人 47人	74人 32人	
	合計 74人	合計 130人	

(n=204,  $\chi^2$ -test, N. S)

(30.4%) に比較し、女性の 79 人 (48.8%) が不安を持っていた。

#### 4) 異性との出会いについて

異性との出会いについては表 3-4 に示した。男女間の意識差は無く、いずれも 8 割前後の学生が異性との出会いを成熟した人間関係能力を身につける機会ととらえていた。一方男性の 2 割、女性の 1 割は刺激の一つでしかないと答えていた。

#### 5) 性的成長度の基準について

性的成長度の基準については表 3-5 に示した。学生たちは性体験が無いことを「遅れている」という表現で互いを評価し合う場面がよく見られる。特にこの傾向は男性の方に強いと予測していたが、調査では男女間の意識差は無く、いずれも 6 割前後の学生が性的成長は性体験とは関係ないと答えていた。

### 3. 性行動の現状

#### 1) 男女別性交経験率

性交経験率は図 1-1 に示した。経験者は女性 92 人 (女性の 56.4%) に比較し男性は 29 人 (男性の 63.0%) であった。非経験者は女性 70 人 (42.9%) に対し男性 15 人 (32.6%) であった。調査対象数が異なるため男女の比較はできないが、全体的に見ると 121 人 (57.9%) の学生がセックスを経験していた。

#### 2) 初体験年齢

初体験年齢は図 1-2 に示した。全体を見ると 16 歳から 18 歳にかけて大きな山が見られた。この間に全体の 75% が体験していた。最年少は男性が 13 歳、女性が 14 歳であった。

#### 3) 過去の性交対象数

過去の性交対象数を見ると 1 人と答えた者が女性 37 人 (女性経験者の 40.2%)、男性 8 人 (男性経験者の 27.6%)、合計 45 人 (経験者の 37.2%)、2 人と答えた者が女性 12 人 (13.0%)、男性 6 人

(20.7%), 合計 18 人 (14.9%), 3 人と答えた者が女性 12 人 (13.0%), 男性 3 人 (10.3%), 合計 15 人 (12.4%), 4 人と答えた者が女性 11 人 (12.0%), 男性 2 人 (6.9%), 合計 13 人 (10.7%), 5 人以上と答えた者が女性 14 人 (15.2%), 男性 6 人 (20.7%), 合計 20 人 (16.5%) であった。対象数が最も多かった者は男性 50~60 人, 女性 10 人で, 複数の人との性交体験を持つ者は 48 人, 経験者全体の 39.7% であった。

#### 4) 現在の交際状況

現在, 特定の人と交際している者は 85 人 (全体数の 40.7% 男性 43.5% 女性 39.9%) で, その内キスやペッチョングを行う交際をしている者が 79 人 (交際中の者の 92.9%, 全体数の 37.8%) であった。特定の交際相手がいる学生はキスやペッチョング・性交等を性的関係で日常化していることが考えられる。

また 1) の性交体験者 57.9% から現在も肉体的接触を含めた交際をしている 37.8% を引くと, 現在は性交から遠ざかっている者が全体の 2 割近くいると予測される。よってこの時期の性教育はこの学生達にとって過去の体験を振り返り, 異性との関係作りの有り方を考えさせる機会になると考えられる。

#### 5) 避妊の現状

避妊の現状をみると, 性交経験者 121 人の内「必ずする(した)」と答えた者が 61 人 (性交経験者の 50.4%), 「時々する(した)」と答えた者が 29 人 (24.0%), 「ほとんどしない」「したことがない」と答えた者が 30 人 (24.8%) だった。この 30 人の内訳は女性 24 人 (性交体験女性の 26.1%), 男性 6 人 (性交体験男性の 20.7%) で女性経験者の 4 人に 1 人, 男性経験者の 5 人に 1 人は避妊に無頓着なことがわかった。避妊の意識調査では 98% の女性が避妊は自分の行為に責任を持つためにどちらからでも言うべきと答えていたのに比較すると, 意識は持ってい

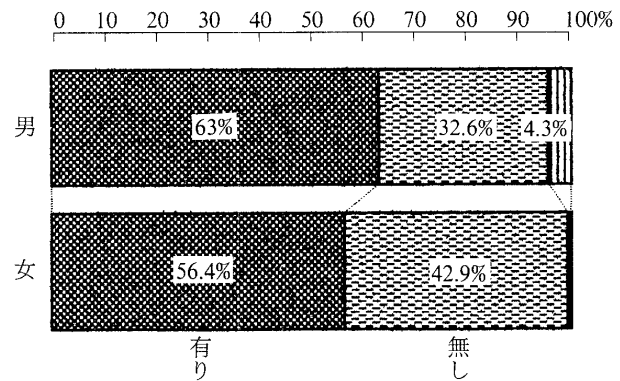


図 1-1 男女別性交経験率

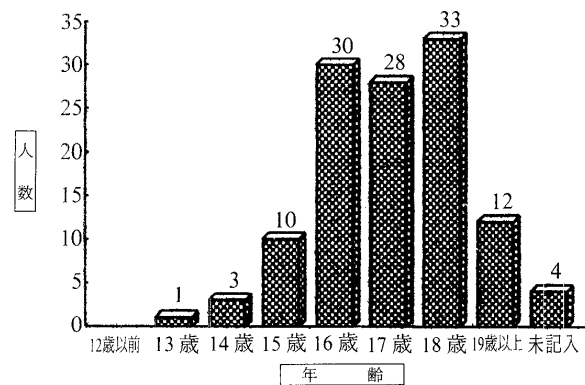


図 1-2 性交初体験年齢

表 4-1 避妊の現状

必ず避妊をする (した)	61 人 (49.3%)
時々する (した)	29 人 (27.1%)
ほとんどしない (したことがない)	30 人 (17.4%)
無回答	1 人 (0.7%)

表 4-2 必ず避妊をしている者の方法

コンドーム単独	40 人
膣外射精単独	5 人
コンドーム&膣外射精	3 人
コンドームまたは膣外射精	13 人

表 4-3 避妊に消極的なのは

	自分	相手	両方	未解答
男性解答者	7 人	0 人	5 人	3 人
女性解答者	1 人	25 人	13 人	5 人

るが行動が伴わない女性が24人、女性全体の14.7%いることがわかった。

6) 避妊の方法

「必ずする」「時々する」と答えた学生90人の過去の避妊方法は、コンドームが83人、膣外射精が32人、フィルムが2人であった。コンドームが広く学生の間で浸透している一方、膣外射精も依然学生の間では活用されていることがわかった。その他の方法はあまり浸透していなかった。

また、「必ずする」と答えた61人の方法を見てみると、コンドームの単独が40人、膣外射精の単独が5人、コンドームを使用しかつ膣外射精を行う者が3人、コンドームか膣外射精のどちらかを行う者が13人であった。つまり学生本人は必ず避妊をしていると考えている中に膣外射精を避妊ととらえている者が18人いた。よって「必ずする」と答えた者の内でコンドーム着用という最も望ましい行動ができていたのは43人、性交経験者の35.5%であると結論づけられる。

避妊・性感染症予防の観点からコンドームの常用は望まれるところだが、まだ3割強の学生にしか浸透していない事実が指摘される。

7) 避妊をしない者の現状

避妊を「時々する」「ほとんどしない」「したことがない」という59人(男性15人 女性44人)にどちらが避妊に消極的か尋ねた結果は表4-3の通りである。男性側が消極的と答えた者が32人(避妊を常時行わない者の54.2%)、女性側が消極的と答えた者が1人(1.7%)、男女いずれも消極的と答えた者が18人(30.5%)で避妊に消極的な男性とそれに流されている女性、男女いずれも消極的という2通りの組み合わせが想定された。

学生があげた理由を表4-4に示した。

表4-4 避妊をしない理由

男性解答者	女性解答者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンドームをつけると気持ちよくない</li> <li>・何もつけなくて一つになった気がする</li> <li>・面倒</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手が嫌がる</li> <li>・男性が大丈夫と言うので</li> <li>・つけると相手が射精できない</li> <li>・場に流される</li> <li>・つける間がしらける</li> <li>・自分の説得不足</li> <li>・別にこちらからも要求しない</li> <li>・今まで大丈夫だったので</li> <li>・成り行きです</li> <li>・面倒</li> <li>・つける暇がない</li> <li>・何となく</li> <li>・わからない</li> </ul>

8) 性交体験の無い学生の意見

性交体験の無い学生85人にそのことをどのようにとらえているか尋ねた。解答者は女性62人男性9人 合計71人(83.5%)で、その内容を分類すると女性の場合「セックスのない交際を望んでいる」「話し合ったが結婚するまではしないように決めている」という意見に代表されるような純潔派が7人、「本当に好きな人がまだ現れていないので」「マイペースでいこうと思っている」「自分自身を大切にしたい。セックスについても本当に好きな人と自然にしたい」という意見に代表されるように、時期より異性との出会いや自分の気持ちを重視するという気持ち重視派が39人、「自分が一番遅れているような気がする」「少し焦りか何かわからないがあると思う」「できれば早く経験してみたい気もする」という意見に代表されるような焦り派が15人であった。男性には純潔派はおらず、気持ち重視派が4人、焦り派が5人であった。

清純派・気持ち重視派のように、性交に対して自分の考えを持ち行動している者がいる一方で、周囲の状況や耳にする情報に不安を持ち自分の現状に自信を持たず、性交を他者との関係の中でとらえられない者もいた。



## 2. 性教育の授業実践

### [1 時限]

山本の出産記録は過去に見た者がどのクラスにも数名いたが、「ビデオを見るのは今回が2回目。最初に見た時は目隠しをしてしまった。今考えると情けなく思う。そのようなことをする必要はまったくなかった」(女性)「高校の時も同じものを見たが、あの時よりも今日の方が色々考えさせられた。性の意識のせいかもしれない」(男性)と新たに得るものがあったことを感想として書いていた。

多くの学生が興味深く見た背景には、近い将来体験するであろう妊娠や出産の様子がありのまま描かれていたことに加え、自分の命も新しく生まれる命も大切にするという山本夫婦の性に対する姿勢が多くの学生の共感を呼んだと思われる。「自分は妊娠についてあまり関心がなく女性だけの問題だと思っていたが、ビデオを見て考えが変わった。ただ子供を生むだけじゃないかと思う人も多いだろうが、それは命の大切さ、生まれることのすばらしさを知らないからだと思う」と書いた男性もいた。

### [2 時限]

2 限目は前回出されたアンケートの感想や質問を中心に展開した。学生からは「自分の体をもっと知りたい」「性行為を体験しての不安」が要望の中心であったので、具体的に現在の彼らの現状に合わせて日常生活で役立つ知識や技術を伝達した。性機能の月サイクルの変化と実際の体の変化、その見方や月経困難症の原因と対処の仕方、性交時の注意やマナー、避妊の方法については前回のアンケート結果をもとに学生たちの誤った知識を指摘して、妊娠を目的としないのであれば性感染症との関連もあるのでコンドーム使用を勧めた。

2 限目は講義と質問形式で学生の性知識の確認を目的に進めたが、どのクラスも興味を示す中、男子の多い情報処理科は前向きな反応が得られず一方的な講義で終わった。しかし講義終了後、何人かの男性が具体的な質問に来た。その際「みんなの前では聞きにくい」との発言もあり、改めて相談室の必要性を感じた。一番積極的だったのは老人ケア科だった。教師と学生の心理的距離、女性と男性の割合、福祉専攻と言う学生の資質がテーマの展開に影響したと思われる。

### [3 限目]

3 限目は「なぜ今性教育なのか」と言うことから入り、専門学校での2年間の学習の課題を自立の4側面(経済的自立・精神的自立・社会的自立・性的自立)から問いかけた。特に性の自立については池上の言う①自分の意志で行動すること ②相手を尊重すること ③正確な知識を持って意志を決定していくことの3つを判断の基準とした伝えた。

中絶や性感染症についてはすべてのクラスに経験者がいることが予測されていたが、経験を振り返る意味からも正確な情報にふれることは大切なことなので、中絶に関しては15分のビデオを使用し優生保護法の歴史、妊娠週数の数え方、術式、術後の問題、中絶に対する世論などに触れた。中絶は自分の人権だけでなく胎児の人権も関わってくることを、正確な知識を持って行動すれば避けられること、中絶という体験は一つの問題解決ではあるが、新たな問題を生み出す可能性があることなどを伝えた。講義後6人の学生が中絶後の問題を巡って相談に来た。手術直後から半年を経過した学生まで様々おり、相談の内容も術直後の頭痛、出血、生理不順、男性との金銭をめぐるトラブル、水子供養など様々であった。中絶後のケアの大切さを改めて確認できた。性感染症については病気の症状、感染源、感染経路、治療、予防について話し、自分の体を(外生殖器・分泌物・皮膚・リンパ節等)を日ごろからよく観察すること、性交時は必ずコンドームを使用すること、生理時の性交は避けること、異常がある時は専門医の診察を早めに利用すること、

性交経験者はエイズ検査を定期的に利用すること等、自分の体を大切にする具体例に触れながら自分の体への配慮が相手の体への配慮の第一歩であることを指導した。

最後に「今日の講義を聞いて自分を振り返り、性の自立の3要素のどれが最も欠けていると思うか」と尋ねたところ、解答者129人中（2クラスは時間の都合で実施できず）63人が「嫌われないために相手の言う通りにし自分の意志を示すことができなかった」「最初は拒んでも求められるとつい流されてしまう」「危ないと思ってもやめる冷静さが欠けている」というような表現で自分の意志の不足をあげていた。また26人が「自分の気持ちばかりが先に出て相手の気持ちを考えずに行動してしまう」「自分にしてみれば大したことではないと思うことが、相手にしてみれば大切なこともあるとわかった」というような表現で相手を尊重することが不足していたとあげていた。最後に40人が「正確な知識を持っていると思っていたがまだまだ足りない。過去を振り返ると知識は持っていたがそれが行動に結びついていなかった」「正確な知識を持つことが一番だろうし、相手の不安を取り除けるのは自分でもあるわけだから、話をして意見を出し合うことが一番だと思う」というような表現で正確な知識に基づく行動の不足をあげていた。

終了後に今回の性教育の感想を書いてもらった。性教育の目標ごとに感想文を整理したのが表5である。

性知識の見直しについては自分の中に誤った知識があったこと、自分が考える以上に知識が不足していたことをあげていた。また人生の連続性の中で自分の性の問題をとらえることについては、過去の性教育や性行動を振り返り今後の見通しを持ったようだった。最後に性を通して自己の自立を考えることについては、現在の自分に不足しているものをあげていた。

性教育の実践に対する学生の受け止め方には種々のものが見られ、「そんなに考えは変わらず、結局つき合った人とは性交をしてしまう」「中学のころから同じような勉強をしてきたと思った」と書いた学生も3名みられた。

### 3. 授業後の意識調査について

調査数202人、前回調査の96.7%の学生から解答を得た。  
授業前後の有意差を見るために $\chi^2$ -テストを使用した。

#### 1) 性における男女の位置関係

性における男女の位置関係についての意識変化は表6-1に示した。男性リードよりお互いに話し合って決めた方がよいと考える者が授業前は126人（60.9%）、授業後は137人（68.8%）と若干増加したが有意差はみられなかった。

#### 2) 避妊の責任

避妊の責任についての意識変化は表6-2に示した。授業前後で避妊の責任についての意識は有意に変化した。授業前調査では女性の98.2%がすでに右寄りの解答だったことを考えると、授業によって男性側の意識が大きく変化したと考えられる。

#### 3) セックスについての不安

セックスについての不安の意識変化は表6-3に示した。両端の解答をした者が授業前は56人（26.8%）、授業後は47人（23.5%）で、中央よりの解答が若干増加したが授業前後での有意差はみられなかった。

#### 4) 異性との出会いについて

異性との出会いについての意識変化は表6-4に示した。授業前後で有意差が見られた。異性との出会いを成熟した人間関係を身につける機会ととらえる学生が増加した。

## 5) 性的成長度の基準について

性的成長度の基準についての意識変化は表 6-5 に示した。授業前後で有意差が見られた。性的成長は性体験とは関係ないと考える学生が増加した。

表 5 性教育後の感想

- 
- 1 現在身につけている性知識の見直し
- ・ 今回の性教育を受けて、自分の性について、セックスや避妊について知識がないことに気付いた。
  - ・ 今まで何回か性教育を受けてある程度のは知っているつもりだったが、知らないことばかりだった。
  - ・ 今までの性教育の中では一番ためになる性教育だと思う。経験して学ぶことと、経験する前に学ぶことの違いがあると思う。
  - ・ 今までは友人から聞くその予備知識があったので、性教育はちゃんと受けるべきだと思う。
- 2 性を通して自分自身に目を向ける
- 1) 人生の連続性の中で自分の性の問題をとらえる
- ・ 性に対しての知識は人間として生きていく上で最も大切なことだと思う。小学校の時から性に対しての教育を受けていく中で、今回は性に対して、特に女性の性について考える良い機会だった。
  - ・ 性は奥深いものがあると思った。
  - ・ 今まで高校や中学で少しは性教育を受けてきたが、恥ずかしかったりまだ関係ないと思って真剣に考えなかったけど、今回の性教育では広範囲に学ぶ、性の悪いところだけでなく良いところや大切なところが知れて良かった。
  - ・ 私は今まで性行為を少し簡単に考えていたように思う。一回セックスを経験すれば後はもう怖くないと言う考えだった。しかし今回の勉強でこんなことではいけないと思わされた。
  - ・ 今までは運よく妊娠しなかったんだと授業を聞いて思いました。これからは自分の力で妊娠を避けようと思います。そして赤ちゃんを生む時は周囲から心待ちにされる環境で生みたいと思う。
- 2) 性を通し自己の自立を考える
- ・ 早く結婚したいと思っていたが、まだ働いてもないし社会的なこともわからないのでまず自立することがとても大切なことだと思った。一つずつできることから自立して生きたい。
  - ・ 性教育と言うのはただ性交のことだけでなく「社会」という大きなものをくっつけて考えなければならぬと思った。
  - ・ 始めはなぜ今性教育なのかわからなかった。けれど勉強しているうちに、今だから勉強しなくてはいけないことがあるということがわかった。
  - ・ 性教育を受けて自分の考えの甘さに気付いたように思う。自分は何をしたらよいか考え行動していきたい。
  - ・ 子供を生むことはすごい事と思うが性に関する事は怖い事恐ろしい事が常につきまとうような気がした。精神的にも大人になることが大切だと思った。
  - ・ 学習して二人で話し合う必要があると思った。性交がお互いの心の満足や互いを知るため、成長するための大切な事だと思えるようになった。
  - ・ 自分をよく知り、相手をよく知る必要があると思った。
-

表 6-1 性における男女の位置関係

	左	やや左	やや右	右	
男女の親しい関係においては、男性がリードした方がよい	前 22 人	59 人	52 人	74 人	男女の親しい関係においては、お互いに話し合っ て決めた方がよい
	後 19 人	43 人	42 人	95 人	

(授業前 n=207 授業後 n=199  $\chi^2$ -test, N. S)

表 6-2 避妊の責任

避妊は男性の責任で女性からは言わない方がよい	前 4 人	11 人	36 人	158 人	避妊は自分の行為に責任を持つためにどちらからでも言うべきだ
	後 2 人	3 人	33 人	162 人	

(授業前 n=209 授業後 n=200  $\chi^2$ -test, P<0.05)

表 6-3 セックスについての不安

セックスは妊娠や病気の不安がつきまとうので怖い	前 21 人	72 人	80 人	35 人	セックスは方法をこ うじれば妊娠や病 気を防げるので不 安は無い
	後 18 人	59 人	94 人	29 人	

(授業前 n=209 授業後 n=200  $\chi^2$ -test, N. S)

表 6-4 異性との出会いについて

異性との出会いは刺激の一つでしかない	前 11 人	19 人	96 人	80 人	異性との出会いは成熟した人間関係能力を身につける貴重な機会である
	後 4 人	12 人	80 人	104 人	

(授業前 n=206 授業後 n=200  $\chi^2$ -test, P<0.05)

表 6-5 性的成長度の基準について

性的成長は性体験の豊富さで示される	前 16 人	58 人	86 人	44 人	性的成長は性体験とは関係ない
	後 14 人	32 人	90 人	64 人	

(授業前 n=206 授業後 n=200  $\chi^2$ -test, P<0.005)

#### IV 考 察

学生の性に関する意識の中では、男女いずれも 8 割前後が異性との出会いを刺激の一つではなく成熟した人間関係を身につける機会ととらえ、性的に成長することは性体験の豊富さでは測れないと認識していた者が 6 割に見られた。これは 1988 年の青少年の性行動調査で「人生における性の意味」について大学生男子の 26%、女子の 34%が知りたいと考えるようになると報告している<sup>9)</sup> ことと同傾向の結果であった。多数の学生が性についてより積極的にその意義を見だし、性

を人間関係のレベルでとらえ、人間の成熟にとって性は不可欠だと感じていることが指摘される。

男女の位置関係に対する意識では、男女が互いに話し合っただけを進めていくことを望んでいた者が6割で、4割は男性リードを望んでいた。避妊についての男女間の意識は、男性の3割強は避妊は男性の責任で女性は口にしない方がよいと上記の男性リードを裏付ける解答をしていたが、女性はほぼ全員自分の行動に責任を持つためにどちらも口にすべきと男女共同責任・共同行為を望んでいた。学生たちの中に旧来からの男女のイメージが依然存在することは、平成6年度の小中学生の意識調査<sup>10)</sup>からも予測できていたが、今回の調査では男性リードを好む女性も避妊に関しては自立した意識を持っていることがわかる。妊娠後の展開は、出産にしろ中絶にしろより女性に深く関わる問題であるので、避妊はむしろ女性がりードするという高い意識がもっと育ってよいと思われる。

彼らの性行動を見るとセックスへの不安（妊娠・性病）を男性の3割、女性の5割弱が持っていないながら6割弱の学生が性交を経験していた。性交は高校在学中から見られ、その内の4割弱は既に複数の相手と性交体験を持っている。これらのことから、彼らの中には妊娠や性病への不安を持ちながら性交経験を重ねている者がいることが予測された。避妊法や性感染を予防するための情報が入手しやすい状況の中でもなお不安が存在する理由として、結婚という社会的承認のない関係での妊娠や感染が周囲に及ぼす影響への悲観的観測、経済的にも社会的にも自立していない状態、わかっているのにできない、しようとしていない自分への不信感、そして何よりそれらのすべてを引き受け解決していくことのできない自己の未熟さへの気付きがあると考えられる。よって現在の自分の状況が不確かであればあるほど、また自分の状況を認識できればできるほど不安は大きくなるといえよう。この時期に不安を持つことは、むしろ学生が自分の現状を認識している証拠だと受け取ることができる。このように性を通して社会の中の自分を客観的にみつめ、自己の課題に気付くことがこの時期の性教育のねらいの一つと考える。

彼らの性行動を避妊行動から評価すると、常時避妊をする者と時々またはほとんどしないという者がほぼ半数ずつで、常時行っている者の方法を見ると、正しい知識に基づいて望ましい行動を取っていた者はその内の7割（性交経験者全体の35.5%）で、残り3割（性交経験者全体の14.9%）は自分が行っていると考えていても実際は危険な膈外射精を行っていた。避妊などの正しい知識を見直す機会としてもこの時期の性教育は重要であると考えられる。

望ましい避妊行動ができないまたはしていない者の解答から、彼らの男女関係には避妊に消極的な男性とそれに流されている女性、男性も女性も消極的という二通りの組み合わせがあることがわかった。避妊行動が浸透しない裏に男性側の避妊に対する意識の低さと、女性側の認識しているが行動できない、即ち意識と行動の不一致という二つの問題があることがわかる。意識の中では避妊についての共同責任・共同行為を望んでいても、実際の間では行動的な男性、受け身の女性というイメージに振り回されて避妊ができないでいる者と、意識はあっても行動しようとしていない者がいるといえよう。

避妊行動をやらない具体的理由としては「気持ちよくない」「面倒」という言葉に見られる自己中心性、「相手が嫌がる」「男性が大丈夫というので」「自分の説得不足」という言葉に見られる女性側の意志の弱さ、「何もつけないと一つになった気がする」「今まで大丈夫だったので」という言葉に見られる非科学的な根拠による行動、「何となく」「わからない」「なりゆきです」という無自覚的傾向等があげられる。このようにこのグループは性知識の量や正確さという問題とは異なる問題を抱えている。C・ドナは保健行動において情報や知識は必要であるが積極的に健康行動を変容させる動機づけには不十分だと指摘し<sup>11)</sup>、いくつかの具体的なライフスキルを報告している

が、性教育においても知識教育だけでは不十分な対象が存在することが今回の調査でも明らかになった。これらの対象者にはC・ドナの報告の中にあるKYBプログラムやEmpower education<sup>12)</sup>のように自分の意志を持ち相手との関係の中でそれを建設的に表現できる能力、一つは自己イメージを高め、自分に振りかかるストレスを処理しながら正確な情報に基づいて意思決定ができるような教育、もう一つは相手の言い分にも耳を傾け自分の意見も表現できるような人間関係教育、コミュニケーション教育、そして社会の中で影響を与えることのできる存在としての自分に気付いていけるようなプログラムの導入が必要だと考える。その際、無意識に身についた性役割観の見直しも求められよう。性交体験のない学生の中に存在した、自分の現状に自信を持たず性交を他者との関係の中でとらえられない者についても同様の教育が必要だと考える。

性関係は男女間で依存関係をつくりやすいため、この時期の学生には自分の意志や考えを持った上で他者と渡り合っていくことの重要性を伝えたい。

今回の授業でわかったことは、性教育の効果は学ぶ側の状態(特にこの時期は性交体験の有無)によって大きく変わるということであった。ビデオや授業の感想を見ると、同じ内容を学習しても経験する前と経験した後では自分の中の反応が違くと学生自身が答えていた。つまり性教育においては事前に学習者の性に対する意識や性行動の実態を知ることがきわめて重要であると同時に、繰り返し教育していくことやその教育方法も学生の体験の拡大に合わせて集団から個別へと展開していくことが必要である。個々の行動が多様化し抱えている問題も広がってくる時期であることを考えると当然のことと思われる。

中絶や性感染症については、予防教育と同時に体験者へのケアも大切な要素である。これらの痛みを伴う体験が長期に渡る劣等感や体験の繰り返しを生むことになれば、本人はもとより周囲の者にとっても性に関する誤ったイメージを植えつけてしまう。よって避妊教育や性病予防教育では、学生が実際にこれらの問題を抱えた時、援助を求めることができるように日頃教師側は十分準備をしておくことが肝要である。教師側がこれらについて狭い価値観や偏見を持っていたら、学生は援助を求めるところか遠ざかることが予測される。今回については6人の学生が個別の相談に足を運んでくれた。

授業後の定着テストを見ると、避妊の責任、異性との出会い、性的成長度の基準については意識の変化が見られた。今回の授業は性知識の見直しと自分自身に目を向けることを目標としているものであったので、男性側に避妊を男女の共通の問題と認識する兆しが見えたこと、異性との出会いや性的な成長について学生の意識が深まったことは授業の成果と考えられる。学生たちは教育後の感想に性の良い面を認識したこと、性教育を単に性交教育ではなく社会との関連でとらえることの重要性に気付いたこと、性の自立のためには精神的な成長が大切であること等を書いてきた。時間をかけ試行錯誤を繰り返しながら自己の性の有りようを深め、人間成長のために不可欠なものとして位置づけてほしい。

最後に今回の調査から学生の受けてきた性教育は学校依存型で、より現実に即した性教育が必要になってくる青年後期において役立つ性教育の機会に恵まれていないこともわかった。性に伴う問題は生涯を通して派生してくるものであるため、あらゆる年齢の者が必要を感じた時利用できる性教育機関の充実や、学校とそれらの機関の連携が今後の課題になってくると考える。

## V 結 語

専門学校生を対象に性意識・性行動の調査を行い、生き方としての性を考えさせた性教育の授業を实践し、それをもとに青年後期の若者への性教育のあり方を考察した。その結果次のことが明らかになった。

- 1, 意識調査では多数が性を人間関係のレベルでとらえ、男女間の性関係は全体の4割が男性リードを望んでいたが、避妊については女性のほぼ全員が男女共同責任・共同行為を望んでいた。
- 2, 対象者の6割弱は性交を経験しており、その中には不安を抱えながら行動を繰り返している者がいた。避妊方法を評価すると望ましい行動をとっている者、自分では取っているつもりでも危険な行為をしている者、避妊には消極的な者がいることがわかった。その背景には誤った知識の思いこみ、男性側の避妊への消極的な態度、女性側の受け身的態度や意志の弱さがあることがわかった。
- 3, 性交体験のない学生は自分の意志で行動し現状に満足している者と現状に不安を持つ者がいた。
- 4, 性教育の实践では、同じ内容でも性交経験の有無により反応が大きく変わることに、中絶や性感染症については体験者へのケアが必要であり、これに対しては教師は偏見を持たないことが重要である。
- 5, 役に立った性教育は学校で行われたものがほとんどで、高校卒業後は性教育の機会に恵まれていないこと、家庭や学校外に適切な教育機関がないことが指摘された。
- 6, 調査・授業結果から青年後期においてはより現実に即した性教育を学生が望んでおり、性知識の見直しだけでなく自分自身を振り返る教育、人間関係としての性を考える教育が必要であることがわかった。

## 引用・参考文献

- 1) 日本性教育協会編, 青少年の性行動, p 21, 1988, 日本性教育協会.
- 2) 城弘子・井崎美代・福富和博, 大学生を対象にした性教育に関する研究, 九州体育学研究, Vol 9, No. 1, p 55, 1995.
- 3) 村瀬幸治, ニューセクソロジーノート, p 73, 1996, 東山書房.
- 4) 専修学校講座3「青年心理学」, P 157, 1989, 専修学校教育振興会.
- 5) 林謙治, 十代の妊娠, P 4, 1987, 自由企画出版.
- 6) 城弘子・井崎美代, エイズ教育のあり方に関する研究, 九州女学院短大学術紀要, Vol 20, p 80, 1995.
- 7) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会, 児童生徒の性, 1988, 学校図書.
- 8) 池上千寿子, 性ってなんだろう, 1989, 大修館書店.
- 9) 上掲 1, p 92
- 10) 熊本市女性リーダー支援事業, 小中学生の「女性観 男性観」意識調査報告, 平成6年度.
- 11) Donna Cross, Skill Building in School Health Education: A Solid Foundation or Cards, Japanese Journal of Health 38, p 5, 1996.
- 12) Nina Wallerstein・Edward Bernstein, Empowerment Education: Freire's Ideas Adopted to Health Education, Health education quarterly, p 381-394, 1988.
- 13) 鈴木康平・山浦一保, 現代青年の交友・恋愛・結婚に関する意識調査, 熊本大学教育実践研究, 第12

号, p 7-p 18 1995.

- 14) 平木典子, 対人スキルのトレーニング, 現代のエスプリ, 293号, p 148-p 158 1991.
- 15) 河野美代子, ティーンズボディー, 1989, 東山書房.
- 16) 山本直英編, 青年の性, 1994, 大月書店.
- 17) 高橋史郎, 間違いだらけの急進的性教育, 1994, 黎明書房.